

## [002\_1979]第二回中央図書館貴重文物展観目録：通 貨が示す歴史の教訓

九州大学附属図書館中央図書館

荒牧, 正憲  
九州大学経済学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1485000>

---

出版情報：大学広報. 359, pp.1-8, 1979-10-12. The Committee of Public Relations Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：

# 大学広報

No.359

昭和54年10月12日発行  
(編集)  
九州大学広報委員会

## 第二回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

は し が き

大学広報第350号(昭和54年5月7日発行)でお知らせしましたように、中央図書館は今年度から特定のテーマを選んで本館所蔵の貴重な文献や書画類を逐次展観していくことにいたしております。

その第二回として「通貨がしめす歴史の教訓」というテーマのもとに、第一次世界大戦前後のドイツ紙幣を中心として、当時の帝政ロシア、オーストリア・ハンガリア、ポーランド等の珍しい紙幣を下記により展示公開することにしました。教職員や学生諸君が多数来観されるようご案内いたします。

なお、今回の展示に際しては、展示紙幣等の選定・配列・解説等につき経済学部の荒牧正憲教授にひとかたならぬ御尽力と御指導を頂きました。ここに衷心より御礼申し上げます。

記

場 所 : 中央図書館メインロビー

期 間 : 9月11日から12月15日まで

(約3か月間)

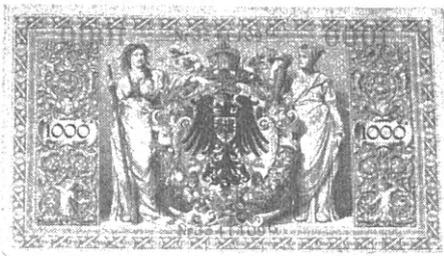
展 観 資 料 と そ の 解 説

I 北 欧 諸 国 の 銀 行 通 貨 ( 19 世 紀 末 か ら 20 世 紀 初 頭 の )



ドイツ銀行券

1000 Mark 1874



ロシア

1) ロシア国立銀行券(1889~1909)

これは別名ニコライエフスキー銀行券とよばれた。1ルーブル券を別とすると、その他はすべて、ロシア最後の皇帝ニコライⅡ世の在位中(1899~1917)に発行されたものである。王冠に権威づけられた正真正銘の兌換銀行通貨であるが、後述の経過からみて、まさにロマノフ王朝の最後を飾るにふさわしい時期に陽の目をみたものである。

ロシアは、西ヨーロッパ諸国よりずっと遅れて資本主義的發展の道を歩きはじめたが、19世紀末から20世紀のはじめにかけて、この道を急速につき進んだ。後發資本主義国に特有な封建遺制(おくれた封建的農業制度とツアリーの専制政治)を多く残しつつもロシアは、西欧の機械技術と資本を導入し、また国家財政の支援のもとに経済の重化学工業化を進展させたのである。これはまた資本の集積と集中との進展、独占資本の形成、つづいて金融資本の寡頭支配の実現の過程でもあった。ロシアの国立銀行は1860年に創設された。これが、中央発券銀行に成長したのは、金本位制採用後の19世紀末のことである。この国立銀行を頂点に、第1次大戦前までに、50行の株式銀行、1,108の相互信

用組合、317行の都市銀行が出現して活動し、またフランスおよびドイツの資本参加を背景に先述の金融寡頭支配が形成された。1903～13年のブーム期に冶金工業、機械工業、石油、セメント、砂糖、煙草、私鉄、海運などの重工業化に寄与した株式銀行は、大戦の開始とともに国庫の不足を満たし、また産業や商業および株式投機などにも介入し、その寄生性を強めた。1917年までに、銀行は468の工業および非工業部門の資本を支配し、株式会社企業の19%、資本金の44%を独占した。この金融資本の力が王冠の権威を支え、またこの通貨の通用力を保証したのである。しかし、1898年には社会民主労働党が産声をあげた。日露戦争(1904～1905)、血の日曜日(1905)、戦艦ポチョムキン号の反乱(1905)、ストリピンの弾圧政治などを経て反体制派の活動も前進した。1905～1907年の革命は、1917年2月のブルジョワ民主主義革命の導火線となり、また10月社会主義革命への道をも切り開いたのである。1917年国立銀行はソビエト権力によって国有化され、ロマノフ王朝も終焉した。金融資本の支配力が革命政権により取って代られたからである。

ロ) オーストリア・ハンガリア銀行券(1902)

オーストリア・ハンガリア銀行の設立は1816年であるが、1878年までにオーストリア国立銀行となり、さらに1899年に株式銀行となって金および現金通貨を準備に銀行券を発行する銀行となった。つまりオーストリアとハンガリアにまたがる独占的発券銀行となったのである。この銀行券は、兌換されなかったが、铸造価格で買上げることを同行に義務づけていたので、金価値と同じ値うちで流通した。ところで、オーストリア・ハンガリア王朝(1867～1918)は、プロシヤ戦争後、ハプスブルグ王朝の再建のためオーストリアのブルジョワ階級とハンガリアの地主階級の連合で樹立されたものである。二重王国の建設により、国内の民族解放運動と民主主義闘争を抑圧しようとの意図は、結局は、第1次大戦後の解放運動やソビエト革命の成功によって果せず、1918年に崩壊し、オーストリア、ハンガリア、チェコスロバキアにそれぞれブルジョワ国家が生れた。同行は、1922年にオーストリアの国立銀行となった。

ハ) ポーランド国紙幣(1919)

ポーランドの資本主義化は1900～03年の恐慌が契機となって進められた。産業の集中と独占化が進んだが、ロシア、ドイツ、オーストリアによる分割支配下での資本主義化は、同時にこれら支配国の資本にますます従属する傾向をつくりだした。この過程で、ポーラ

ンドとリスワニア国の社会民主党、ポーランド社会党、民族民主党、ポーランド社会民主党などが生れ、また労働者や農民のストライキも高揚したが、第1次大戦後ポーランドは、ポーランド社会党の指導者を首班とする政府をもつことになった(1918年11月)。このパドレフスキー政府は反ソ政策をとり、ポーランド・ソビエト戦争に参加し(1920年4月)、また共和国憲法を制定して言論、集会、出版などの権利をみとめたもののその基礎が固まらず(1921年3月)、1924年4月、クーデターによってより反動的なピウスツキー内閣の成立を許すこととなった。この紙幣はこうした激動期に発行されたものである。

## ニ) ウクライナ紙幣(1918)

ウクライナは、19世紀後半に黒土地帯の小麦生産の資本主義化が進み、「世界の穀物倉」といわれたところである。1917年のソビエト革命後、ウクライナでも反革命勢力と革命勢力とのいわゆる内戦がつづくが、1919年、ウクライナ社会主義共和国を宣言してソビエト連邦に参加することとなった。これは内戦中の発行になる紙幣である。

## ホ) ライヒス銀行券(1910)、帝国金庫証券

ライヒス銀行は1875年3月の銀行法によって設立された(前身は1846年設立のプロシャ銀行)。これに先立つ71年と73年の貨幣法によって、ドイツは普仏戦争による賠償金50億フランを基礎に金本位制を導入し、また1874年の法律で帝国金庫証券(Reichskassenschein)を発行する措置をとり、設立されたライヒス銀行を中央発券銀行としたのである。帝国金庫証券は金証券に類する性格のものであるが、ライヒス銀行券は1910年に法貨となり、また金、金地金または外貨払いの小切手または指図証で兌換される(最低1,000マルク)銀行通貨であった。いうまでもなくドイツは、「五つの穂を同時に手玉にとる」ビスマルク外交によって勢力均衡をはかり、対内的にはユンカーと独占資本の利害均衡の上に帝国統一を目指して、19世紀末には帝国主義国へと大きく飛躍した。それとともに対外侵出の足場を固めはじめるようになった。

大戦前のドイツは、石炭業、鉄鋼業を主な軸として電機工業、機械工業、交通業が目ざましい成長をとげ、生産の大規模化がおどろくべきテンポで進展した。それとともに、100分の1足らずの大経営が労働力の3分の1以上、蒸気力と電力の7割5分以上を独占するようになった。この過程に併行して、銀行独占も進み、ベルリン9大銀行は「総合銀行」といわれるまでに広範に信用業務を独占し、全信用銀行の資本金の7割以上、資金のほぼ7割を支

配下におくようになった。こうして成立した金融資本は、株式制度を通じて資本の面からも管理の面からも支配機構を強め、さらには国家をもまきこんで、植民地支配のための活動を積極的におし進めるようになったのである。展観の1,000マルク券は、ドイツ帝国主義の象徴であり、またホーヘンツォレルン家を支える大黒柱でもあったのである。

## II 大戦とインフレとライヒス銀行券



電撃戦と考へてはじめられた第1次大戦は4年間の長い恐ろしいたたかいとなった。軍事費は急増し、ドイツ国民は、自給自足のきびしい耐乏生活をよぎなくされることとなった。いわば孤立無援の帝国主義戦争だったのである。1,000億マルクをこえる軍事費は主に戦時公債(Kriegsanleihe)で調達されたが、そのための貨幣・金融制度の改革が、開戦とともに着手された。

1914年の銀行法の改正によって、まず、ライヒス銀行券と帝国金庫証券の金兌換が停止された。そして、大蔵省証券(Schatzanweisungen)がライヒス銀行券発行の保証準備の枠内にくみこまれることになった。また、ライヒス銀行管理下に貸付金庫が設立され、同

行で貸付の担保となりえない有価証券や商品を担保とする貸付をみとめ、また貸付金庫証券 (Darlehnskassenschein) 発行の権限をあたえた。ところで、この貸付金庫証券は私取引では強制通用力はなかったが、公金庫では収受され、ライヒス銀行はこれを正貨準備に充当することができたので、これはいわばライヒス銀行券の変形であった。こうして軍費調達が可能にされた。もっとも帝国は、長期国債の公募によって散布された資金を吸収し、インフレを抑える対策も講じた。市中銀行、貯蓄金庫、信用組合、生命保険会社、郵便局など応募機関となった。この短期公債の長期公債による借換えは1916年3月ごろまでは成功したが、それ以後は尻抜けとなったのである。物価は1913年を基準として18年11月には2.3倍、19年11月には6.78倍となった。

大戦中は、開戦時に比べ、ライヒス銀行券は29倍にふえたが、帝国金庫証券や私立銀行券の発行額はさして増加しなかった。また紙幣は9倍にふえたが、金貨、補助貨は0.04%にまで減少した。1922年末にはライヒス銀行券は441倍、紙幣404倍となり、また貸付金庫証券は134億5000マルク発行された。金貨、補助貨は流通からまったく姿を消した。ライヒス銀行券は金融資本の力によって誕生して育成し、戦争をかかえた金融資本によって減価の度をふかめられた。

しかし、インフレのテンポが急角度をたどるようになったのは1923年7月頃からであった。巨額の公債、賠償負担、動員解除に伴う諸経費、復興費をかかえたドイツ経済は、天文学的数字で示すほどの財政需要を必要とした。1923年1月のフランス・ベルギーの両軍のルール侵攻、ライヒス銀行のマルク支持策の破産を契機にインフレが爆発した。物価は、はじめは週ごとに、やがて1日ごとに、ついには同じ日の1時間ごとに上昇した。絶頂の11月20日の卸売物価は、なんと、戦前の1兆4,134億倍となった。濫発された紙幣がだんだん大額になるのは当然としても、とうとう印刷が間に合わなくて、裏が白紙のまま流通に出された。1922年7月以降のものはすべて裏が空白である。王冠もなくなっているし、金融資本の力も完全に失墜している。このインフレは23年末のマルクの設定(1レンテンマルクを1兆円紙幣マルクと交換)、24年の新貨幣単位の制定で治まったが、それにはきびしい財政負担が代償となった。

Ⅲ 緊 急 通 貨



大戦開始とともに、小額通貨不足を緩和するため、地方公共団体、商工会議所、大会社、工場などが緊急通貨(Notgeld)を発行した。約400もの発行主体が、2,000種以上の通貨を発行した。開戦時の発行総額は1,000万マルクだったが、1924年1月には1億1,000万マルクに達した。1922年7月17日の「緊急貨幣発行および兌換法」により、政府は、兌換による緊急通貨の回収を画り、また新規発行の担保差入れや大蔵大臣の許可などの制限を設けようとしたが、完全に規制することはできなかった。

これは狭い地域や自治体内部で流通したが、それ自体通貨としての値うちに乏しいものだったので、図柄を多彩にしたり、連続した物語りをのせたり、また当時の民衆の心理を利用する警句や詩をつづったりして、人々が収集したくなるように工夫したものが多い。とくに興味をひくことは、これまでのドイツの歴史過程を彷彿させるいわゆるBurgfriede(域内平和)が根づよい生命力をもっていることである。十分な調査と検討に価する資料である。

展覧資料を二群に分けてみた。第一群は発行主体を基準にしたものである。コルバッハ市、軍票、修道院所領管理部発行、エルバーフェルト市、アーレン市、ポメルン地方ラウエンブルグ市、モスバッハなどから出されたものを展示した。ケルン市発行のインフレ時のものは大額になっている。第二群は画柄の面白いものをならべてある。ドイツ農民戦争の指導者トマス・シュンツァゆかりの地のアルステット城、教会、市役所などが画かれている。また、アルテンブルグ城にまつわる物語り、ゲルマン人のローマ攻略物語、敗戦と植民地喪失、重い賠償負担にたいする警句などがあり、興味つきないものがある。